ふるさとへ

題字は住友朔峰・釧路書道連盟会長

新星に故郷の名残すロマン抱き続けたい

アマチュア天文家　渡辺和郎

１９７０年４月１日、弥生中グランドから暁の空に見えたベネット彗星

故郷の僕の部屋の窓からはいつも海が見えた。釧路は港町だから大体どこからでも海は見えるが、高台になっているので見晴らしがきいた。眼が覚めると一面流氷に覆われていたことがあったし、幼少のころは地震でずーっと沖合いまで潮がひいて、浜にたくさんの人が集まった記憶がある。

番屋裏の入り組んだ路地を近道しては浜でよく遊んだ。その浜は弁天がヶ浜と呼ばれ、知人の岩礁から東に広がる砂浜で、千代の浦へと続き、その先は紫雲台のがけ上に太平洋炭坑のボタ山を望んでいた。天気の良い日は昆布がいっぱい干してあり、海水浴もできたし大木で組まれた砂止めでかくれんぼや、護岸提の上に座って将棋やひなたぼっこをした。暑い日はアイスバーを買うのも楽しみだった。小学生のころ、紫雲台の岩礁に難破船があって、臨港鉄道の線路伝いに探検にでかけたり、海に落ちる夕日を眺めた。

釧路の夏は霧が多く、釧路崎灯台の霧笛がボーッと夜通し鳴り響くのがまくら元で聞こえた。一転、冬は晴れの日が多く、夜空に最初に覚えたのがオリオン座だった。中学に入って星に興味をもち、カメラと三脚を持って弁天ヶ浜の高台にある弥生中学に通った。そこは校舎が街の灯りを遮へいして浜から沖合いにかけて星がよく見えた。

一九七〇年早春、アフリカで発見されたすい星が明るくなって長い尾を引いた。肉眼で眺められ、かじかむ手で二週間くらい機材を背負って毎朝通った。不思議な光景

を仰ぎながら、いつかは自分も新しい星を見つけたいと思った。

現在住んでいる札幌は、生活には便利だが光害で星はほとんど見えない。その上、冬場は雪が多く晴れないのが致命傷だ。そこで、観測、撮影を釧路の仲間、フィルムを基に軌道計算などをする後処理をこちらで受け持つ連携プレーで新天体の発見に挑んでいる。当時、星好きの中高生が集まって釧路天文サークルという同好会を結成していたが、近年、新しい惑星を探すパートナーとなったのは、その当時の仲間たちだった。

三年前、釧路を訪れた時、弁天ヶ浜へ足を延ばしてみた。そこにはコンクリートの防波ブロックがあふれ、新しい港ができて、あの砂浜は影も形も無くなっていた。故郷はいつまでも変わらないで欲しいと思うが、確実に変わっていることを思い知らされた。

新しい惑星を発見し、軌道を確定した者には自由な命名を国際天文学連合に提案する権利が与えられる。有名な一等星ベガ・スピカ・アルタイルなどと同じように、国際的に認知された学術名として、文明が続く限り未来永劫残るものだ。今、多くの惑星を発見し命名権をもつようになったが、迷わず付けた名は「（５２９３）弁天ヶ浜」と「（５６８６）千代の浦」だった。

以降、毎日高校に通うとき渡った「（４４５９）幣舞橋」、実家のある釧路と札幌を結ぶ特急「（５２１４）おおぞら」、釧路湿原に舞う「（５０６４）丹頂鶴」など、故郷にちなんだ名称が星となって、地球と同じように太陽の周りを回り続けている。

弁天ヶ浜で星を追ってから三十年近くたった。まだまだ、昔を懐かしむ歳でもないが、故郷の名を少しでも多くの星に残し、ささやかなロマンを生涯抱き続けていきたいと思っている。

わたなべ　かずお
１９５５年　北海道釧路市生まれ

天文家。彗星・流星などの太陽系内小天体の軌道決定のための位置観測の分野で活躍している。これまでに５００星以上の新しい小惑星を発見し、「時計台」「大通り公園」「知床」「間宮林蔵」「たこやき」など、日本に関係する地名・人名を国際天文学連合（ＩＡＵ）の小惑星命名委員会へ提案。世界的な小惑星ハンターとして知られ、多くの星の名づけ親となっている。2007 年 6 月には日本人宇宙飛行士の星出彰彦・山崎直子・古川聡３名の名前を小惑星に提案する。

現在、札幌道新文化センター「スターウオッチング・銀河を歩こう」の講師をつとめるかたわら、天文雑誌「天文ガイド」執筆陣の一人として、また「天文年鑑」編集委員として天文普及活動に携わる。2006 年、北大の科学技術コミュニケーター養成講座を修了し、天文や宇宙を知る市民シンポジウムの開催など、サイエンス・コミュニケーターとしての活動も展開している。

日本天文学会・東亜天文学会の各会員。天文年鑑編集委員。彗星会議運営委員。東亜天文学会小惑星課長。札幌天文倶楽部を主宰。元札幌市青少年科学館天文技術専門員。

「ぼくらの夢の星空」（北海道新聞社）、「小惑星ハンター」（誠文堂新光社）、「天体写真マニュアル」（共著：地人書館）、「続 日本アマチュア天文史」（共著：恒星社）
など著書多数。

札幌市厚別区厚別中央３条４丁目３－８